

公立小松大学マヤ文明調査団が、ホンジュラスの世界遺産「コパンのマヤ遺跡」で、5世紀マヤ王の石碑断片を発見

公立小松大学次世代考古学研究センター長の中村誠一特別招聘教授、小川雅洋特任助教の率いる日本・ホンジュラス合同調査団は、コパン遺跡では35年ぶりとなる新たな石碑断片（石碑64と命名）を発見しました。コパンにおいて謎の時期とされてきた5世紀後半の重要な歴史情報が含まれており、コパン王朝史解明への貢献が期待されます。

公立小松大学は、2022年7月に山本学長がホンジュラスを訪問し、ホンジュラス国内の文化遺産全体を管理・運営するホンジュラス国立人類学歴史学研究所と交流・連携協定を締結しました。2023年3月には、世界遺産「コパンのマヤ遺跡」中心部の3つの神殿建造物（神殿7, 8, 11）を対象とした共同調査実施協定を締結し、日本学術振興会科学研究費補助金、日本政府からのノンプロ無償資金協力見返り資金等を使って、現地機関と共同で発掘調査や修復保存を進めてきました。今回の発見は、その過程でなされたものです。

（解説）

マヤ文明は、紀元前1,000年頃からスペイン人たちに征服される16世紀まで、メキシコ南部のユカタン半島を中心に、グアテマラ、ベリーズ、ホンジュラス、エル・サルバドルの5カ国にまたがって栄えた古代文明です。金属器や牛・馬といった家畜を持たず、歴史上、地域全体が統一されることがなく、古典期と呼ばれる最盛期には、各地に壮大な石造都市が建設され、独自の支配王朝をもつ60から70の王国が栄えていました。中でも、ホンジュラスのコパンは、グアテマラのティカル、メキシコのカラクムルやパレンケと並んで、古典期マヤ文明4大王国の一つとされています。コパンでは、西暦426/427年に、グアテマラのティカルに起源を有すると思われる外来王「ヤシュ・クック・モ」（「最初の・ケツァル鳥・コンゴウインコ」の意）により、マヤ王朝が創設されたことが分かっています。

アメリカ大陸の他の古代文明が洗練された文字を持たなかったのと対照的に、マヤ王は自身の事績を石の記念碑に刻ませ後世に残しています。今回発見された石碑64もそのうちのひとつで、石碑全体の3分の一程度の断片です。中村誠一特別招聘教授が国際共同研究を実施中のドイツ・ボン大学「古典期マヤ碑文データベース・辞書編纂プロジェクト」のプラーガー博士、ワグナー女史らの解説によれば、西暦465年7月7日の日付を有し、4代目王と6代目王の名前が刻まれ、コパン王とグアテマラのペテン低地の都市との関係が語られています。コパンでは王朝初期の記念碑は、後の時代に何らかの理由で破壊されて埋められてしまっているためほとんど発見例がなく、その歴史情報とともにたいへん貴重な発見です。